

第1章 戦場

中国からの引揚げ

引揚げでの壮絶な体験

石井美智子さんのお話から

○満州 中国東北部。

○吉林省 中国東北部の省。表紙裏地図

○葫蘆島 現在の遼寧省西部の葫蘆（旧葫蘆）島市。この港が「満州」から日本への引揚船の出発地となった。

○コーリヤン イネ科の一年草。中国東北部などで多く栽培されるモロコシの一種。

私は父の仕事の関係で、家族で「満州」の吉林省というところにいきました。しかし父は、昭和十九（一九四四）年に召集されて、フィリピンのレイテ島の激戦で亡くなりました。

昭和二十年八月十五日、私が小学校一年生の夏休みどきに戦争が終わりました。日本は戦争に負けたのです。そして、海外にいた日本人は皆、日本に帰りなさいということになりました。それで、慌てて荷物をまとめました。しかし、その間に中国人が押し寄せ、家の中の物も、外に置いてある農機具も、馬や作物も全部持って行ってしまいました。私たちは、母と六歳の私、四歳と二歳の弟の四人で、少しばかり荷物を持ち、夜も昼も一生懸命歩いて、日本人の集合場所にたどりつきました。日本に帰るための船が出る葫蘆島まで行かなければいけないのですが、私たちはソ連の国境に近い北の方にいましたので、徒歩と、馬を乗せるようなそまつな車で移動しました。途中、中国人やソ連人がおそってきました。野宿を続けていましたので、途中で倒れる人が何人もいましたし、亡くなる人もいっぱいいました。食べるものも無く、残飯を拾って、ストーブの上で焼いて食べて、馬のえきであるコーリヤンも食べました。

秋になったら、いよいよ食べる物がなく、中国人が作った畑の中に残っている小さなお芋や、アカザという草を刈ってきて、それを大きな鍋でゆでて、みんなで分け合い飢えをしのいでいました。しかし、そんなものではとても間に合わないのです、冬に向けては、日本人みんなでお団子のようなものや、たばこを紙に巻いて作って、それを中国の街に行つて、並べて、みんなで売りました。帰ってきたら、みんなでお金を出し合つて、また次のものを買つて、

○**栄養失調** 食物の摂取不足、又は摂取は十分でも消化・吸収の悪いときやタンパク質などの摂取不足により現れる異常状態。浮腫、貧血、下痢などを伴う。

毎日、作っては売り、作っては売る。そんな生活が続きました。

その間、お風呂にも入れませんので、衛生的ではなく、シラミという虫が発生して、頭から指から体じゅうをはっていくのです。子どもたちは、そのシラミで病気になるしました。しかも消化の悪いコーリヤンを食べて**栄養失調**と消化不良になりました。体力のない赤ちゃん、子ども、お年寄りから、どんどん亡くなりました。毎日のように人が亡くなり、死体が山のようになくなっていきました。

そして、私の弟も、コーリヤンを一気に食べてしまい、消化不良で胃や腸を壊して、亡くなってしまいました。もう一人の弟も亡くなりました。戦争が終わってわずか一カ月半でした。具合の悪い子どもに母もついていてあげたいのだけれど、みんなが大変な状態なので、母はみんなと一緒に働きました。

その間も、毎日のように中国人やソ連人がやってきて、お金になりそうなものをみんな取り上げて持っていくのです。何度も収容所が襲われるので、場所を変えて、何回変わったかよく分かりません。日本の元気のある若い人は男女問わず、労働力になるとして連



イメージ図

列車での移動の様子

○舞鶴^{まいづる}
る市。

京都府北部にあ

れて行かれましたし、子どもとお年寄りほとんど亡くなってしまいました。私も、とうとう死にそうになりましたが、何とか命は助かりました。

そして、翌年の春、日本に帰れるという知らせが来ました。みんな喜んで、荷物をまとめて、船に乗りました。みんな、やせ細りお猿さんのようになっていました。その船は、葫^こ蘆^ろ島から舞鶴^{まいづる}に向かったと思います。

船に乗ったときは結構食べられたと思います。ですから、みんなはにこにこ元気です、その頃は私もちよっと元気になっていったと思います。うれしい帰国の道でした。しかし、母は疲れと栄養不足で動けなくなり、寝たきりになってしまいました。私は必死で看病^{かんびょう}をし、母は少しずつ元気になりました。

戦争は、人が毎日亡くなっていくことが当たり前のようにでした。そして、人が亡くなるというのに、泣くこともなく、ただ無^む気^き力^{りき}にじっと見ているだけです。今思い出すと、恐ろしい^{おそろ}ような、本当にあったのかと思うような体験をしました。



母を看病している様子

イメージ図

我が家に手伝いに来ていた中国人は、とても優しく、いい人たちでした。しかし、日本人に支配されたときがありましたので、その考えが逆転さかてんしてしまつて襲おそつてきたということもあったのでしようし、日本の人たちが持っていたものが魅力的みりょくてきだったということもあると思います。それでも、中には、街角まちかどで母がものを売っているときに、「帰ったら子どもに食べさせなさい。」といつてものをくれる中国人もいました。そして、別れるときは、お互いに抱き合つて、泣いて別れたということもあったようです。

母は、日本に帰つて来てから数年後、弟二人が亡くなつたときは悲しかったけれども、これからは一人分しか食べ物を用意しないでいいと、ほつとしたのだそうです。そのとき涙も出なかつた自分がとても悲しかつたと言っていました。

私は、戦争をなくすためにできることはいろいろあると思います。それは、まず、家族が仲よく暮らすことです。その次に、ご近所の人たちとも仲よく暮らすことです。そして、お友達とも仲よく暮らすことです。大人になつたら、お仕事の関係の人や、周りの人たちとも仲よく暮らすことです。そうして、世界じゅうの人たちとも仲よく暮らすことです。これをやっていけば、戦争はそうそう起きないのではないかと思います。それなら、みんなもできると思うのです。それが大切ではないかと思ひます。まず、仲よく、相手のことを思つて暮らすこと、これが戦争やけんかが起きない一番の要因だと思ひますし、平和に暮らせる原点かと思ひます。

DATA

平成23年度南区平和事業
聞き取り

- ・平成23年8月2日
- ・藤野児童会館



石井美智子(いしい・みちこ)さん

- ・昭和13(1938)年生まれ
- ・札幌市南区在住